源氏物語における「らうたし」

大財友子

以下は41年度提出の卒論の抜萃である。卒論の目次を掲げると次のようになる。

序論
第一章　「らうたし」と「うつくし」の動詞形からの考察
第二章　「らうたし」の本質について
第三章　「うつくし」の本質について
結論

ここでは、紙面の都合上、第二章―「らうたし」の本質について―にしぼって述べることにする。詳しくは、41年度提出の卒論及び副資料を参照していただきたい。

なお底本として、吉沢義則著「対校源氏物語新釈」六巻本を用いた。（　）内に、その所在を、巻名・巻数・頁数の順に示し、年齢は（　）の中にアラビア数字で示した。

「らうたし」の本質について

「らうたし」「らうたげなり」は、対象のどんな状態に対して使われているのであろうか。松村誠一氏は、「国語と国文学」（昭和40年6月号）で、次のように分類しておられる。

「この語の意味を検討するに当たっては、いちおう子どもの場合と成人の場合とを区別しておくことが無意味でないように思われるので、紫上や女三宮が夫婦生活にはいった十四歳以上を仮に成人とし、十三歳以下を子どもとみておくことにする。」とされ、

成人の場合

(1) 病気のため衰弱している場合
(2) 対象の元来細やかな状態
(3) 物思いに沈んだり、思い悩んだりしている状態
(4) 思い悩み、思いあまって、うちそむいたり、はじらいを示したりする状態
(5) 途方にくれたり、物も覚えず、ただ恐れおののいたりする状態
(6) 泣く状態
(7) 身も心も投げかけて、この人こそはと、ひたすら頼ってなびきかかる女性の状態
(8) 「ちご」のようなおさなさ、わかさ、たどたどしさ

子どもの場合

（成人の場合にくらべて、対象のどういう状態に対して「らうたし」「らうたげなり」と言うのかを明示した例がすくない）

(1) 対象の細くちいさな状態

(2) 物を思って沈む状態

(3) 身も心も投げかけて頼り切っている状態

(4) はっきり対象の状態を表わしていない

と分類された。しかし源氏物語における全用例をあてはめてみると、この分類にはまらないものがある。

あいなき心のさま〳〵乱るるやしるからむ、「色かはる」（源氏の心）

とありしもらうたう覚えて、常より殊に語らひ聞え給ふ。（賢木(1)四一八）（紫上を慰める）

これは、湯氏が藤壺や権斎院に対するつまらぬ恋の為に悩んでいるのに対して、紫上が源氏の恋心を怨んでいる状態である。この場合の「色かはる」は、「風吹けばまづぞ乱るる色かはる浅茅が露にかかるささがに」というもので、「私は移り気なあなたを頼りにしていて、始終心配が絶えませぬ」の意である。

又、明石に残してきた明石上を思う源氏に対して、紫上が怨めしく思う状態を、

おぼし出でたる御気色浅からず見ゆるを、（明石上を）（紫上は）たたならずや見奉り給ふらむ、わざとならず「身をば思はず」などほのめかし給ふぞ、をかしうらうたく思ひ聞え給ふ。（明石(2)一〇一）

「身をば思はず」は「忘らるる身をば思はず誓ひてし人の命の惜しくもあるかな」である。

花散里が、帰京してきた源氏に怨みを言っているのを、「らうたげなり」としている。

「などて、たぐいあらじと、いみじう物を思ひ沈みけむ。憂き身からは、同じ歎かしさにこそ」と宣へるも、おいらかにらうたげなり。……。尽きせずぞ語らひ慰め聞え給ふ。（澪標(2)二三）（花散）

これは、帰京した源氏に対し、「どうして、貴方が須磨へ行かれたお別れの時は、こんな悲しいことは比類ないことだと、ひどく物思いに沈んだことでしょう。つらい（忘れられがちな）我身にとっては、御帰京遊ばされても嘆かしさは同じことです。」と、花散里が、男の浮気心を、うらむのである。

浮舟が匂宮に対して、うらめしく思っているのを、次のように描写している。

女、濡らし給へる筆を執りて、（浮舟）（宮が）

心をば歎かざらまし（浮舟）

命のみさだめなき世と思はましかば

私の恋心を怨めしく思ふものやうだと歌を見て宮が
とあるを、変らむをば怨めしう思ふべかりけりと見給ふ
にも、いとらうたし。（浮舟(6)一〇四）

「心をば」の意は、「不定なものは命だけだと思うのでしたら、男心の不定を悲しむ歎きはあるまいに、不定なのは命ばかりではないので。」

他に、雲居雁が夕霧に対して、中君が匂宮に対して、移り気を怨んでいる。つまり、

歌や言葉により、男の移り気を怨む心を表わす女の状態に「らうたし」「らりたげなり」が用いられている。このような状態は、松村氏の論の中では、特に設定してなく、先に記した分類の、成人(3)の項に入れられたのかとも思われるが、無理があるように思われ、又、前述のように「歌や言葉により、男の移り気を怨む心を表わす女の状態」を「らうたし」「らうたげなり」とした例が七例もあるので、私としては、別に松村氏説の他に一項目設けたがよいと思う。そこで、この設定した状態を考えてみると、先ず、「らうたし」の語の対象はすべてここでは女性である。男性を頼りにしている女性達である。その頼りとしている男性の移り気を怨む心を表わす時の女性達には、当然よわよわしい様子がみえる。故に、相手の男性は、「常より殊に語らひ聞え給ふ」たり、「尽きせずぞ語らひ慰め聞え給ふ」のである。故に、新設定の項目も松村氏の結論と相違するものではない。つまり氏の結論とは、次のようなものである。

「らうたし」「らうたげなり」は、成人であると子どもであるとをとわず、女性に限らず男性でも、また時には人間以外の動物であっても、人がそれらの対象の衰弱した状態、細やかなささやかな状態、物思いにふけり沈んでいる状態、思いあまった状態、途方にくれる状態、泣きしおれている状態、頼り切ってなびきかかる状態、おさなげな状態などに接して、そこに認められる、はかなさ、よわよわしさ、たよりなさ、たどたどしさなどに強く心を引きつけられ、その対象を自分のそばから絶対に離すことができないような気持ち、あるいは、これをじっと見まもり、語りなぐさめ、衣類に手を触れ、さらにからだにも触れて、かきなでたり、抱いたり、ふところに入れたりして、対象に向かって何か働きかけずにはいられない、それをうち捨ててはおけないような気持ちになることをあらわしているものと考えられる。

ここで、私としては、松村氏の分類にあてはまらないものを考察して、氏の結論に合うかどうかを検討するものである。やはり分類にないものとして、臥している状態に「らうたし」「らうたげなり」が用いられている。

雲居雁(17)
姫君は昼寝し給へる程なり。羅の単衣を著給ひて臥し

給へるさま、暑かはしくは見えず、いとらうたげにささやかなり。（常夏(3)八三）

雲居雁（17）が臥している様を「らうたげに」と表現している。「ささやかなり」の語でもわかるごとく、たどたどしさ、たよりなさがある。源氏物語においては、臥している様を「らうたし」「らうたげなり」としている例は、他に三例ある。それを示すと、

㋑紫上(11)女君、ありつる花の、露に濡れたる心地して、添ひ臥し給へるさま、うつくしらうたげなり。（紅葉賀(1)二九一）

「露に濡れたる心地して」でわかるように、よわよわしさが感じられる。この例でわかるように、「うつくし」と「らうたし」は併用できるのである。

北方は胸の思ひを落着けて

㋺さうじみはいみじう思ひしづめて、らうたげに寄り臥し給へり…真木柱(3)一八九）

自分から、心のはなれた夫髭黒を、新しい女玉鬘のもとへと送りだそうとしている北方が、胸の思いを落着けて臥しているさまには、よわよわしさがうかがえる。

㋩中君(24)姫君、物思ふ時のわざと聞きしうたたねの御さまの、いとらうたげにて、…（総角(5)一六七）

「物思ふ」状態にはよわよわしさが見出せる。臥している状態四例ともに、よわよわしさ、たどたどしさがある。

次の用例をみていこう。

玉鬘（23）

いとをかしげにおも痩せ給へるさまの、見まほしらうたい事の添ひ給へるにつけても…（真木柱(3)一七九）

落葉宮（24・25）

世とともに物を思ひ給ふけにや、痩せ〳〵にあえかなる心地して、打解け給へるままの御袖のあたりもなよびかに、けざかうしみたる匂ひなど、取集めてらうたげに、柔かなる心地し給へり、（夕霧(4)三三）

女二宮（14）

黒き御ぞにやつれておはするさま、いとどらうたげにあてなる気色まさり給へり、（宿木(5)三九）

中君（25）

昔よりはすこしほそやぎて、あてにらうたかりつるけはひなど…（宿木(5)二八八）

これらは四例とも、悲しみや物思いのための衰弱の状態を「らうたし」「らうたげなり」と表現しているのであり、病気による衰弱ではない。故に分類「成人(1)」にもはいらないし、「成人(3)」では、言葉が足りない。故に分類に当てはまらない状態、即ち次のような状態がある。

悲しみや物思いのため衰弱している状態この状態においても、「はかなさ」「よわよわしさ」という要素がある。故に、松村氏の結論に反するものではない。

今まで主として成人についてみてきたが、子どもの方を考えてみることにする。やはり分類外のものがある。例えば、

紫上(10)
若君は、いと恐ろしう、いかならむとわななかれて、源氏はいと愛しき御膚つきも、そぞろ寒げにおぼしたるを、らうたく覚えて、（若紫(1)三三）

これは、途方にくれたり、物も覚えず、ただ恐れおののいたりする状態で、やはり、よわよわしさがある。又次の用例をみると、

紫上(10)
うちそばみて書い給ふ手つき、筆執り給へるさまのをさなげなるも、らうたうのみおぼゆれば、……（若紫(1)三六）

とあり、「をさなげなる」状態に、たどたどしさ、よわよわしさがある。これも分類外である。

このように、「らうたし」「らうたげなり」は、松村氏の分類にあてはまらないものもあるが、それらもすべて、氏の結論を翻すものではない。

ところで、「らうたし」「らうたげなり」の対象を、性別して調べてみると、次のようになった。

人物関係			
男女別不明	男	女	
一例	一五例	一五三例	全用例中
全用例中	全用例中	全用例中	八六・九％
○・六％	九・一％		

その他（猫・鈴虫）　六例　全用例中三・四％

圧倒的に、女性に関するものが多い。そこでまず男性の方からみていくことにしよう。男性十五例中、一例のみが、源氏十七歳で成人、他は十四例ともに、小君の十二三歳を最高として、子どもとなっている。十四例中、

源氏　1～4歳　一例
薫　2歳　三例
春宮　1歳　一例
三条に残された夕霧の子　8歳以下　二例
源氏の孫達　10歳以下　一例
四郎君・三郎君・孫王の君だちの四人　いと小さき程　一例
真木柱の弟　8歳　一例

この十例はすべて、十歳以下である。幼い男子は、むしろ女の子のようにみえるものである。小君（12・13歳）にしても同じである。十二三歳位ならば、源氏や夕露は既に元服しているのであるが、小君はまだ童であり、「をさなし」の語が六例もあり、これほど一人の人物に用いられた例は、他にあまりない。そこで、十四例とも女性的なものを見出し得ることになる。

次に、成人の例をみると、源氏（17）が夕顔の死後、悲しんで泣いている状態を、

泣き給ふさま、いとをかしげにらうたく、見奉る人も惟光も

と悲しくて、おのれもよよと泣きぬ。（夕顔(1)一四三）

成人の男子が泣く状態を、「らうたく」と表現したのは、男性というよりもむしろ女性のような、よわよわしさをみいだしたからであろう。これまで調べてきたように、「らうたし」「らうたげなり」は、女性的なものに用いられている。そこで、「らうたし」「らうたげなり」の本質を、松村氏の説を広げて、女性美としたい。氏の言われた、はかなさ、よわよわしさ、たよりなさ、たどたどしさという要素は、女性美の中にもちろん含まれることになる。

ここで一例、「らうたし」の対象について問題となるものがあるので述べてみたい。

源氏と、夕顔の女房で今は玉鬘の女房となつている右近とが、玉鬘のもとにくる文について話している場面である。

右近　　他人　　姫君に
「更に人の御せうそこなどは、聞え伝ふること侍らず。
見もせ
さきぐも知ろし召し御覧じたる、三つ四つは、引きかずに返して
えし、はしたなめ聞えむもいかがとて、御文ばかり取り
入れなどし侍るめれど、御返りは更に。源氏が玉鬘に返事聞えさせ給ふ折
を勧められた時だけ　姫君は
ばかりなむ。それをだに苦しい事に思ひたる」と聞ゆ。

源　　右近
「さてこの若やかに結ぼほれたるは誰がぞ。いといたう
書いたる気色かな」と、ほほゑみて御覧ずれば、「かれ
はしふねくとどめてまかりけるにこそ。内のおほい殿の
中将の、このさぶらふ童女の名ふみるこを、もとより見知り給へり
ける伝へにて侍りける。又見入るる人も侍らざりしにこ
そ」と聞ゆれば、源「いとらうたき事かな。下臈なりとも、
かの主たちをば、いかがいとさははしたなめむ。公卿と
いへど、この人のおぼえに、必ずしも竝ぶまじきこそ多
かれ。さるなかにも、いと静まりたる人なり。おのづか
ら思ひ合はする世もこそあれ、掲焉にはあらでこそ言ひ
まぎらはさめ、見所ある文書きかな」など、とみにもう
ち置き給はず。（胡蝶(3)三）

この場合の「らうたき」の注釈を調べてみると、

1. 増注源氏物語湖月抄（弘文社刊）中巻―三九六頁いとらうたき事かな→〔孟〕源詞也〔師〕柏木の事をのたまふ也
2. 定本源氏物語新解（金子元臣著）中巻―八一五頁注釈なし
3. 源氏物語総釈第三　胡蝶の巻（佐伯梅友著）一九一頁いとらうたき事かな。→それはほんとにかはゆい話だ。
4. 対校源氏物語新釈（吉沢義則著）巻三―三二頁いとらうたき…→それはかはいゝ事だね。柏木をほめた詞。

2と3は、特に説明はないが、すべて、「らうたき」の対象を柏木としているようである。

2以下の注釈書は、湖月抄の師説＝箕形如菴の説を踏襲したのであろう。なお松村氏も、「成人の男性に用いられた

のは、この他に一例あるだけである。」として、「らうたき」の対象を柏木としておられる。念のために述べておくが、「らうたし」の語が、成人男子に用いられたのは、今までの説の通りとすると、源氏と柏木の二例のみである。

私としては、玉鬘の童女みるこが手紙をうけとったことを「らうたき事」と考えたい。

その理由として、

イ、「らうたし」の語は、圧倒的に女性に対して用いられた例が多い。ちなみに、柏木は男性であり、みるこは女性である。

ロ、成人男子に、「らうたし」の語が用いられたのは、右の（胡蝶(3)三）の例を除いて考えると、泣いている状態の源氏（17）に対してのみであり、成人男子が泣くというのは、非常に特殊な場合である。故に、成人男子である柏木（21）より、みることした方がよい。

ハ、「らうたし」の語は、はかなさ、よわよわしさ、たどたどしさをもっているものに、一つの美があるものと考えられ、全用例とも、よわよわしさ等をけなすのではなく、それらをほめる言葉として用いられている。しかし、「いと静まりたる人」である柏木に、はかなさ、よわよわしさ、たどたどしさは見出せない。みるこであれば、みいだしやすい。

ニ、右近などのような、女房たちは、「更に人の御せうそこなどは、聞え伝ふること侍らず。」というように、柏木の手紙を誰も取次がなかった。しかし幼い童のみるこが取次いだ。その事を聞いた源氏が、「らうたき事かな。」とほめ、そのすぐあとで、「下臈なりとも、かの主たちをば、いかがいとさははしたなめむ。」といって、柏木の玉鬘への文を、うけとらないで、柏木にきまりのわるい目をさせることがあるかと、右近等をたしなめている。故に、源氏の気持ちとしては、文を取次いだ方がよかったのであり、「らうたき」は、源氏の意にかなったみるこに対して用いられたと考えてもよいと思う。

このような理由で、「らうたき」の対象は、みることしたのであるが、他の用例と同じように、結論に果たして合うかどうか考えてみる。たしかに、結論に一致する。大人たちは誰もうけつけないようにしている手紙をうけとったみるこには、おさない故のよわよわしさがある。故に、「らうたき」の対象は、童女みること考える。

すべて、今まで考えてきたように、「らうたし」「らうたげなり」という語は、よわよわしさ、はかなさ、たよりなさ、たどたどしさという要素をもつ女性美を表わすものといえると思う。